

漁父 四首

其一

漁父飲 誰家去
魚蟹一時分付
酒無多少醉爲期
彼此不論錢數

漁父は飲む 誰が家にか去く
ぎよかいいちじ ぶんぶ
魚蟹 一時に 分付す
酒は多少と無く 酔ふを期とす
ひしせん 彼此 銭の数を論ぜず

【其一】酒を飲みに行く漁夫…。どんなお店へ行くのやら。どさつと投げ出す魚とかに。酒の量など決めてない。ただ心地よく酔いたいだけ。酒と魚の取り替えて、酒代などは問題外。

其二

漁父醉 蓑衣舞
醉裏却尋歸路
輕舟短棹任橫斜
醒後不知何處

漁父は酔へり 蓑衣にて舞ふ
酔ひの裏に却つて 歸路を尋ぬ
たんとう おうしや
輕舟 短棹 横斜するに任せ
醒し後は 何れの処なるか 知らず

【其二】ほろ酔いきげんの漁夫…。みのかさつけて舞をまう。酔い心地でたどる帰りの水路、小舟にさす短いさお、舟が横に曲がろうとままよ。目を覚ました時にはどこにいるやら。

其三

漁父醒 春江午
夢斷落花飛絮
酒醒還醉醉還醒
一笑人間今古

漁父は醒む 春江の午
夢断えて 落花 飛絮
酒醒めて 還た 酔ひ 酔ひて 還た 醒む
いっしょう じんかん こんこ
一笑す 人間の今古

【其三】目を覚ました漁夫…。春の江の昼下がりに。夢路断えてみれば散る花と飛ぶ柳絮の中。目覚めてはまどろみ、まどろんではまた目覚める。人間世界の今昔なんど、思うだけでおかしくなる。

其四

漁父笑 輕鷗舉
漠漠一江風雨
江邊騎馬是官人
借我孤舟南渡

漁父は笑ふ 輕鷗拳がる
ばくばく 一江の風雨
江辺の騎馬 是れ官人
こしゅう 我が 孤舟を借りて 南に渡る

【其四】笑う漁夫…。軽やかに浮かぶかもめ。はてしなき江のおも一面に、風雨おおう。江のほとり、馬にまたがっておいでなのはお役人、わしが舟で南へ渡してくれと言うんじゃろう。

蘇東坡 近藤光男より抄出



五代人画・漁父